

# Villa Madama : Raphael's Intention

---

Noriko Kotani

## ヴィラ・マダマ — ラファエロの意図 —

---

小谷 訓子

「さて、私は古代の建造物に関して多くを学んできました。注意深く勤勉な態度でもって努力を惜みずこれに挑んできました。古代の最高の知識人たちの書いたものを読破し、彼らの記述と現存する建造物とを比較しました。従って私は、最低限必要とされる古代建築の知識を保持していると宣言することができます。」——これは、ラファエロの手紙から抜粋した一文だが、ここには、古代芸術に対するルネサンス期の基本的な姿勢が記されている。その姿勢とは即ち、古代の作品を理解するためには、古代のテキストを研究しなければならないという書物重視のルネサンス人の考え方である。このような考え方をもって建築をデザインしたラファエロの作品は、古代文献をコンセプトの土台とする。なかでも1518年頃から1520年代にわたって制作されたヴィラ・マダマは、そういった古代文献に対するラファエロの姿勢を顕著に表す建築物である。

ローマ郊外のモンテ・マリオに建つヴィラ・マダマは、ラ

ファエロによってオリジナル・プランがデザインされ、その中核に円形の中庭を持ち、素晴らしい眺望を備える作品である。このヴィラは、ルネサンス期のローマにおけるヴィラ文化を発展させる重要な働きを担ったのだが、残念なことに、ラファエロの突然の死や教皇の交代劇、そして1527年のローマ略奪や、度重なる所有権の移転などから未完成のままで現在に至る。また、造営の経緯に関する詳細を記録するものがあまり残っていないことから、歴代の研究者たちは、現存する建築物と五枚の素描（ウフィツィ美術館蔵）を主な手掛りとして、ラファエロのオリジナル・プランを推測するという作業を繰り返している。本稿では、そういった先行研究にラファエロの手紙二通、即ち「失われた手紙」と教皇レオ十世に宛てた手紙の二通、の分析と、当時のローマ教皇庁における宮廷文化の分析を加えることで、ヴィラ・マダマ造営計画の下敷きとなる文献主義的な構想をより詳細に解明することを目的とする。